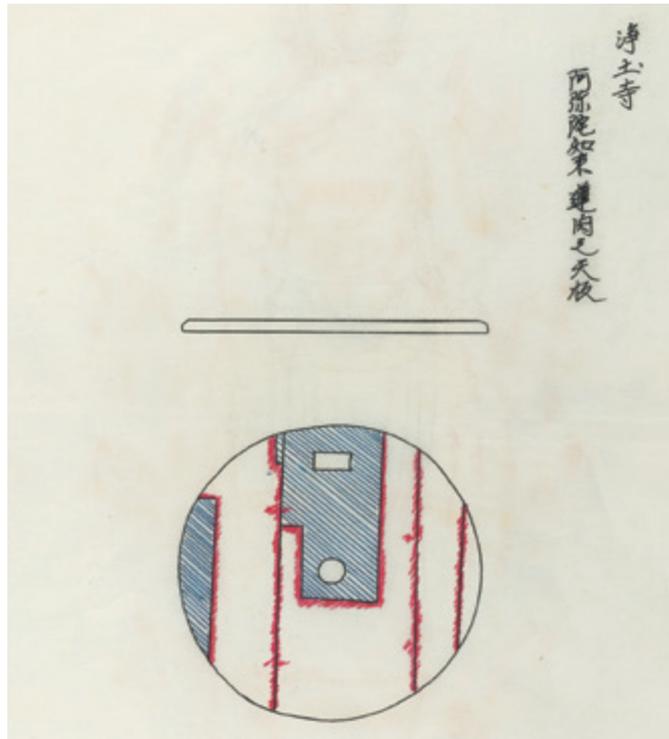




口絵1 阿弥陀如来立像 兵庫・浄土寺



口絵2 「浄土寺阿彌陀如来立像」(「日本美術院彫刻等修理記録」のうち) 奈良国立博物館



口絵3 「浄土寺阿彌陀如来蓮肉之天板」(同上)

# 兵庫・浄土寺裸形阿弥陀如来立像

山口 隆 介

奈良国立博物館では、なら仏像館において常時百件ほどの彫刻作品を展示している。三か月に一度程度の展示替えをおこないながら、仏像や神像などの多彩なバリエーションと多様な展開を紹介しているが、館蔵・寄託の彫刻作品で屈指の大きさを誇り、上半身裸体の特異な姿もあつて展示室でことに目をひくのが兵庫・浄土寺所蔵の裸形阿弥陀如来立像〔口絵1、図1〜10〕である。<sup>(1)</sup>この像は平成九年（一九九七）に当館に寄託されて以降、長らく展示に供してきたため、存在は比較的よく知られているように思う。しかし、その大きさをゆえに実査の機会が限られ、基礎的な情報が十分に提示されているとはいえない。このたび、移動しての調査が実現したので概要を報告し、関連する問題について若干の考察をおこなうことで今後の研究に資するものとした。<sup>(2)</sup>

## 像の概要

像高二六六・五cm、髮際高二四三・六cm。<sup>(3)</sup>約八尺（半丈六）の立像である。螺髪は粒状で、肉髻珠と白毫相をあらわす。耳朶を環状とし、三道をあらわす。胸のくくり一条、腹のくくり二条を刻み、臍をあらわす。裙を着ける。裙は上縁部を折り返し、正面中央で右前

に打ち合わせる。左手は垂下し、掌を前に向けて下げ、右手は屈臂し、掌を前に向けて立て、いずれも第一・二指を捻ずる。左足をやや前に踏み出して立つ。

光背〔図11〕は二重円相拳身光。頭光の中心に八葉蓮華を透彫りし、光条二十一本をあらわす。頭光と身光の圈帯に円相十五個を透彫りする。光脚蓮華形。周縁部は、頂上には透彫りした雲烟内に円相を配して、金剛界の大日如来である<sup>(4)</sup>の種子をあらわし、蓮弁形光背を負って雲烟上の蓮華座に坐す化仏を頭光に二、身光に六の計八軀あらわす。

構造については、大正十二年（一九二三）度に美術院（現公益財団法人美術院）がおこなった修理の解説書<sup>(4)</sup>、および昭和四十六年（一九七二）度に同じく美術院が実施した修理の解説書に私見をくわえつつ記述すると次のとおりである。

ヒノキとみられる針葉樹材製で彫眼とし、肉髻珠と白毫に水晶を嵌入する。表面は煉瓦色の錆漆地の上に漆箔をほどこす。頭髪に青色、髮際に緑色、唇に赤色、黒目に黒、白目に白をほどこし、眉、目の上下縁、髭は墨で描く。

頭体幹部は前中後の三列からなり、それぞれ正中線で左右二材を矧ぎ、内削りのうえ割首する。前方材の矧目は両耳前を通る。中間



图2 同 背面



图1 阿弥陀如来立像 正面 兵庫·浄土寺



图4 同 右侧面



图3 同 左侧面



图6 同 右斜侧面

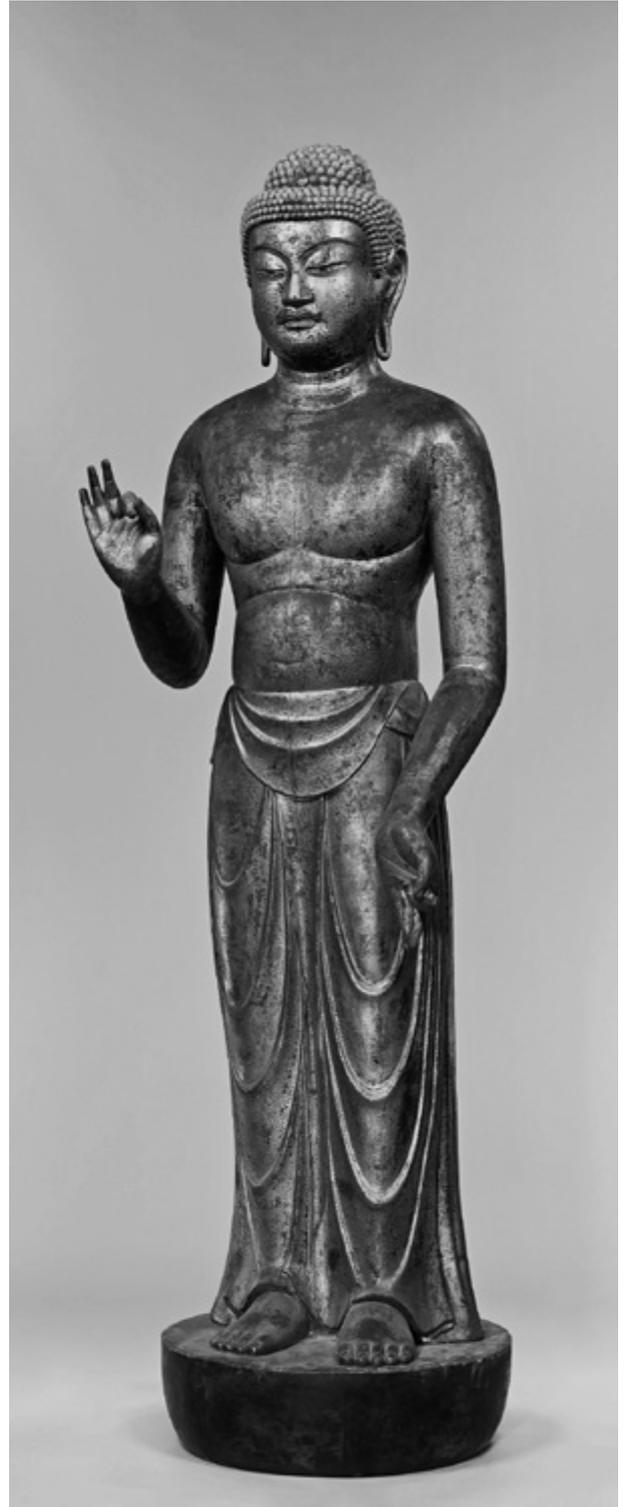


图5 阿弥陀如来立像 左斜侧面 兵庫・浄土寺

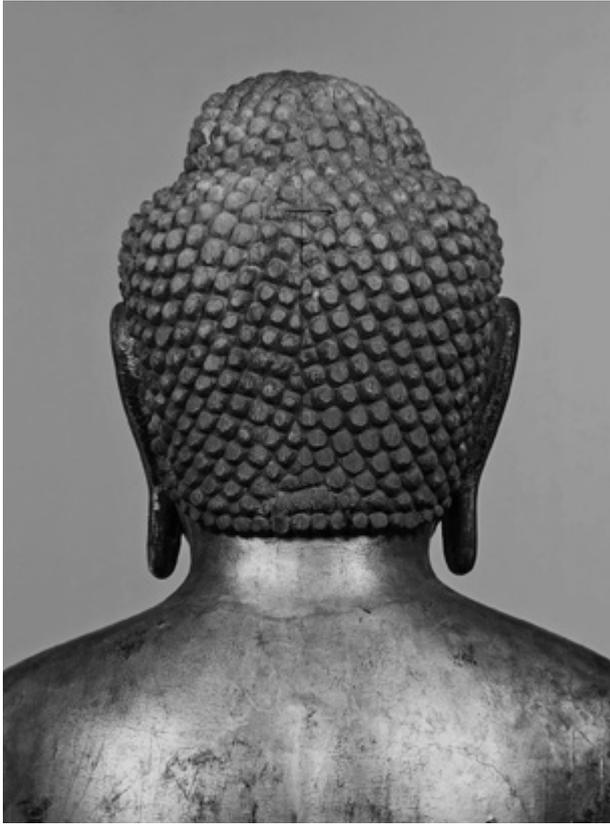


图8 同 头部背面

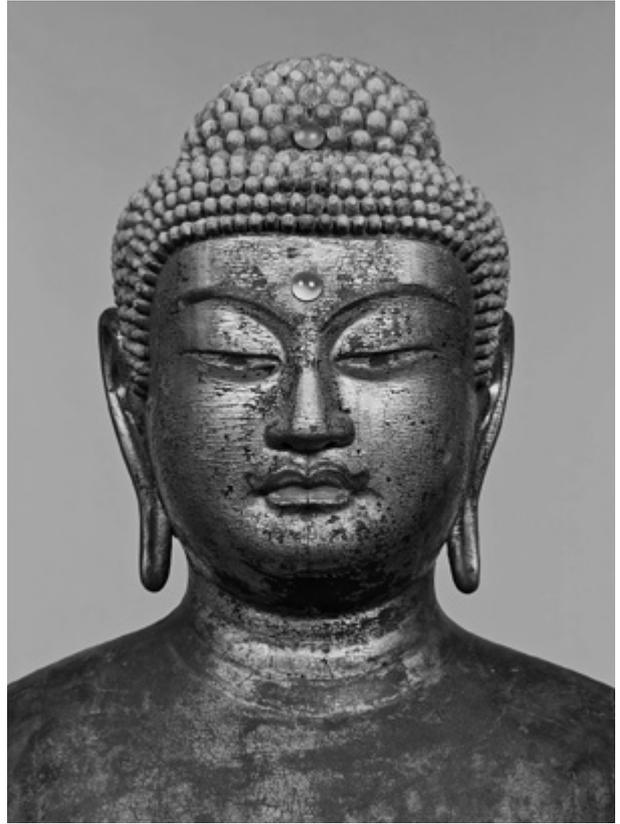


图7 同 头部正面



图10 同 头部右侧面



图9 同 头部左侧面

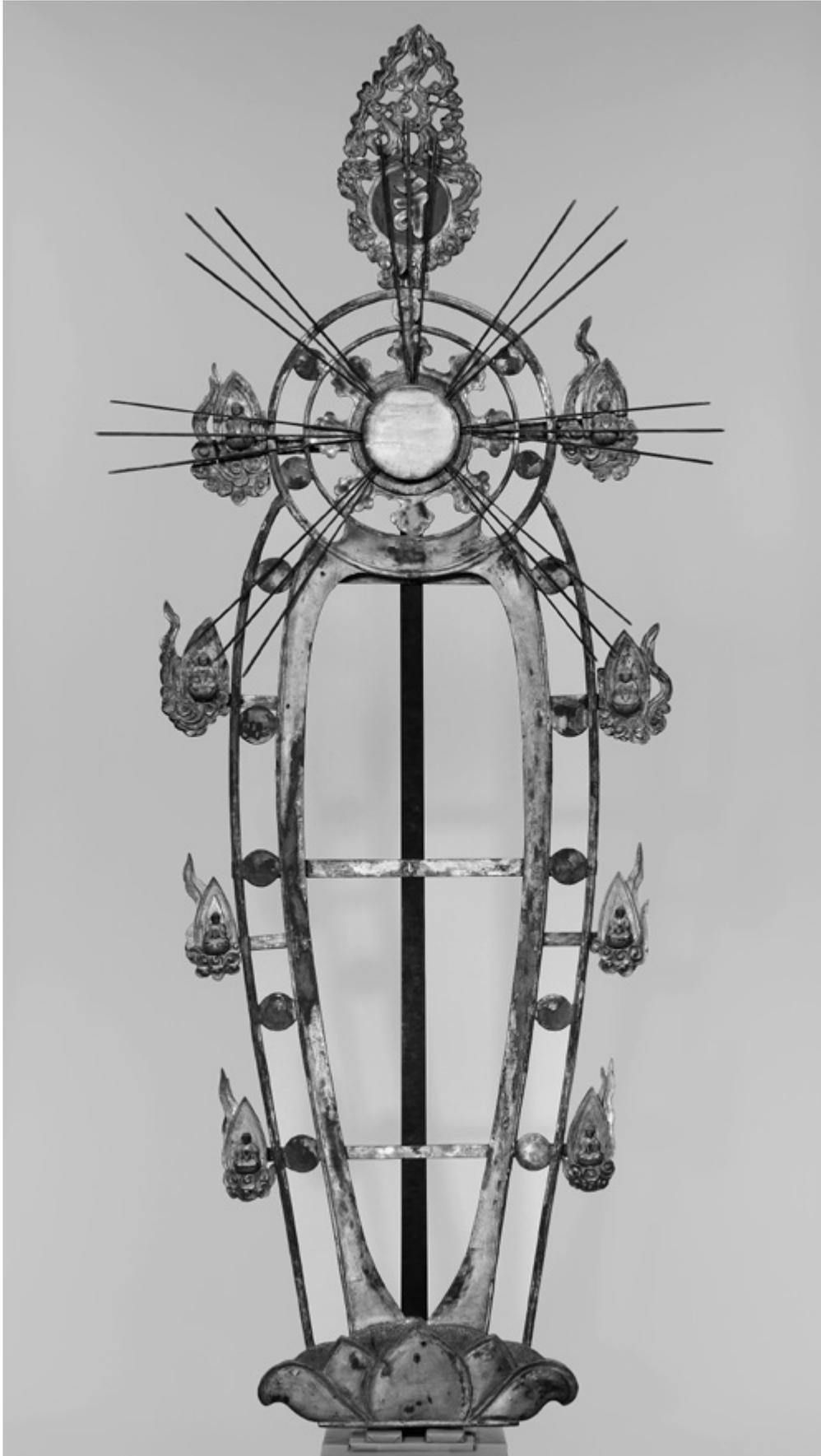


图11 阿弥陀如来立像 光背 兵庫·浄土寺



図12 同 像内

材は頭頂から腰までを一材で造り、それ以下に腰脇から脚部側方をなす別材を矧ぐ。この別材部は、前方材と後方材に各一の角柄を打ち付けて固定する〔図12〕。後方材の矧ぎ目は両耳後ろを通る。両腕は肩・肘・手首で各矧ぐ。両上膊と左前膊は左右に矧ぎ、右前膊は上下左右に矧いで、それぞれ内割りをほどこす。鼻先、右耳、腹部、背部、臀部、左足第一指の右半および足の甲内側、裙裾の左右および後方などに各別材を矧ぐ。足柄は作らず、蓮肉裏面から像底に釘を打ち付けて立たせる。鼻孔と右耳孔は像内に貫通しており、右耳孔よりファイバースコープを挿入して頭部内を観察したが、銘記や納入品の類は確認されなかった<sup>(6)</sup>。

後述のとおり、本像は阿弥陀聖衆が来迎する様子を演劇的に再現する迎講（来迎会）に際

して、縫製した実際の着物をまとわせ、台車に乗せて動かしたと考えられている。こうした実用を想定して、像内はもとより両腕にまで内割りを深くほどこして軽量に仕上げている。また、像内の腹部（地付より一五二cm高）には水平に板（幅四〇・五、奥八・七、厚二・五cm）〔図13・14〕を渡して、その両端を脇腹の表



図13 同 像内（腹部に渡した板を下からみたところ）



図14 同 像内（腹部に渡した板上からみたところ）

面に貫通させて固定し、板の中央に下から挿鉢形の孔（径は上方で二cm、下方で六・八cm）を穿つ。これは像底より心棒を挿入して倒れにくくするためのもので、孔を挿鉢形にすることで心棒を通しやすくとしたとみられるなど、用途に応じた工夫がなされている。

後頭部の髪際には、左右二か所に頭部に円鑲をもつ鉄製の釘を打ち付けている（左方分亡失）〔図15〕。円鑲は孔が左右を向くように取り付けられているため、鉤を挿して光背を支持するためのものとは考えにくく、光背にそのような痕跡も見当たらない。円鑲が取り付けられている位置からすれば、あるいは来迎会に際して着崩れを防ぐべく、着物の襟を吊るために紐をかける等の目的で用いたかとも推測されるが、はっきりしたことはわからない。

光背は縦に四材を矧ぐ。頭光の蓮肉部および光脚の表面に別材を矧ぎ付ける。光条は竹製で、一端を頭光の蓮肉部側面に挿し込み、

三本ずつ七方向に配して圈帯に釘で打ち付けて固定する。頭光に一、身光に三（上・中・下）の裏棧を取り付け、頭光および身光下段の裏棧の両端に雲烟上の花卉形光背を矧ぎ、さらに蓮華座に坐す化仏を矧ぐ。身光の圈帯に左右各二の短い棧を取り付け、それぞれに雲烟上の花卉形光背および蓮華座に坐す化仏を矧ぐ。頂上の雲烟（種子をふくむ）も別材製。雲烟背面の半ば以下に別材製の支柱を取り付ける。

### 保存状態

白毫、台座（口絵2・3、図16・17）の蓮肉天板のうち右側材（幅8cm）および中央後方材（幅一六cm×奥行四五cm）、蓮肉天板より下の周縁部材、反花型、上下框（六方入隅）は大正十二年度修理時の新補で



図15 阿弥陀如来立像 後頭部髮際の鉄製円鑽  
兵庫・浄土寺



図17 同 蓮肉天板



図16 同 蓮肉裏面

ある。以前、建仁元年（一一〇一）快慶作の奈良・東大寺僧形八幡神像について論じた際に、「兵庫・浄土寺の裸形阿弥陀如来像の台座と比較すれば、蓮肉が天板材と周縁部材とから構成される点、周縁部に複数の材を輪状に矧ぎ寄せる点、蓮肉部の裏面を棧木二本で補強する点など、基本的な構造は共通している」と述べ、本像の台座について蓮肉天板以外の部分も当初とみなしたが、ここに訂正する。

このほか、頭頂左方の螺髪の一部と肉髻珠は、昭和四十六年度修理時の新補。化仏は頭光の二軀および身光上段の二軀と、身光の中・下段の四軀とで作風を異にするが、本像はもとより浄土寺本尊

阿弥陀三尊像の両脇侍の化仏や、右脇侍の化仏と髪型や顔立ちが酷似する同寺の逆手阿弥陀如来像とも作風が異なるため、すべて後補とみなされる。光背頂上の雲烟（種子をふくむ）も後補。光背支柱は大正十二年以前の補作とみられる。そのほか、矧目にほどこされた漆箔に一部後補が認められ、彩色のうち黒目の黒、白目の白、唇の赤色は補彩の可能性があるものの、総じて保存状態は良好である。

## 伝来

浄土寺は、重源（一一二一～一二〇六）が東大寺再興と並行して各地に信仰および勧進活動の拠点として建立した別所のうち、播磨別所の由緒を受け継ぐ寺院である。本尊は丈六の阿弥陀三尊像で、『南無阿弥陀仏作善集』播磨別所の条に「浄土堂一字奉安皆金色阿弥陀丈六立像一、并観音勢至」とある。また、神戸大学附属図書館本『浄土寺縁起』（応安五年（一三三二）編纂）には「大仏師丹波法眼懐慶」すなわち快慶の作とあり、中尊像の像内銘記により建久六年（一一九五）四月十五日には造像途中だったことが知られる<sup>(8)</sup>。

本像については、『作善集』同条の「始置迎講之後二年始自正治二年／来迎立像一体」にあたりとみられ、また『浄土寺縁起』には次の記載がある（以下、引用文は適宜新字にあらため句読点をくわえた）。

一来迎具足、建仁元年<sup>辛酉</sup>十月三日、中尊八尺立像、安阿弥陀仏作也、菩薩面二十七、同作、同将束二十七具、天童将束二十四具、舞将束三具、同陵王一具、落蹲二具、唐幡廿七流、結幡四流、幢幡八流、樂器等、大鼓、<sup>（稱）</sup>鍋鼓、方磬、鉦鼓

これによれば、重源による来迎会始修の翌年にあたる建仁元年十月三日までに「来迎具足」一式が制作された。「中尊八尺立像」は本像にほかならず、作者は「安阿弥陀仏」すなわち快慶であり、やはり快慶作の菩薩面二十七面や来迎会所用の装束、幡、樂器等が設えられたことがしるされる。現在、同寺に伝わる菩薩面は、本像とともに制作された二十七面のうちの二十五面と考えられる。なお、『作善集』や『浄土寺縁起』には、当初安置されていた堂宇に関する記述はない。

本像は大正九年（一九二〇）二月の調査を経て、同年四月に国宝に指定された（いわゆる旧国宝。現在の重要文化財<sup>(9)</sup>）。大正十二年度には、同寺重源上人像とともに美術院による修理が計画され、同年八月六日付の『大阪朝日新聞神戸付録』は、視察のために美術院の明珍恒男氏が来訪したことを伝えている。

## 最近の加東

国宝の虫干 加東郡小野町浄土寺では三日、寺内の宝物全部の土用干をなし、一般の展覧に応じたので、約七、八百名の人出があった。因に本年度修繕を要するものは来迎仏と俊来上人<sup>(10)</sup>の本像で、為めに奈良美術院明珍主事は二日来郡。国宝を視察したが、修繕費は約八百円の予算。

技師が現地に出張しておこなわれた修理は十二年度内に完了し、大正十三年（一九二四）四月二十四日に開眼供養が執行される旨を、同月二十二日付の『神戸新聞』が報じている。

国宝の修理出来上る 盛大に開眼供養を執行

加東郡小野町浄谷、極楽山浄土寺の国宝たる開山俊乘房重源上人の像は、昨年末内務省より技術員出張大修繕中であつたが、此程竣工したので二十四日同山に於て開眼式を執行する由。当山は播磨高野の称ある古刹にて、数多の国宝を有する事県下第一であるので、当日は之が陳列展覽を許す筈である。

この記事に本像への言及はないが、美術院や奈良国立博物館に残る修理記録から、重源上人像と同年度に修理されたことは疑いない。そして、このとき台座の大半が新補されたことは前記のとおりである。「日本美術院彫刻等修理記録」(奈良国立博物館蔵)にふくまれる修理前に撮影された写真原板(ガラス乾板)<sup>(11)</sup>(図18)や、これに近い時期の撮影とみられる浄土寺発行の絵葉書の写真(図19)により、当時は浄土堂内の西北隅に東向きに安置されていたこともわかる。

大正十四年(一九二五)六月に上司永晋氏が浄土寺を訪れた際の見学記<sup>(13)</sup>には、「此の堂(浄土堂…筆者注)には金色の弥陀三尊と来迎仏とが安置されてある。何れも国宝である」としてされており、「来迎仏」は本像を指すとみてよい。修理後は、浄土堂内の同じ位置に安置されたいことが、昭和五年(一九三〇)に豊秋(源豊宗)氏が発表した一論の挿図(図20)により判明する。<sup>(14)</sup>

昭和十三年(一九三八)からは東京国立博物館に寄託され、同四十六年まで同館に存した。<sup>(16)</sup>大口理夫氏が浄土寺を訪れた際の見学記(昭和十四年(一九三九)刊行)<sup>(17)</sup>に、「阿弥陀立像一軀(東京帝室博物館出陳)」とあることから、同館への寄託が確かめられる。昭和三十四年(一九五九)刊行の浄土堂の修理報告書<sup>(18)</sup>に掲載された参考図版

〔図21〕や、『古美術』に掲載される永井信一氏の「一論の挿図」<sup>(19)</sup>により、東京国立博物館の本館に陳列されていたかつての様子をうかがうことができる。

昭和四十六年度には、美術院により剝落止めや矧目の再接合、欠損部の補作を主とする保存修理がおこなわれ、翌四十七年の春に奈良国立博物館で開催された「阿弥陀仏彫像展」に出陳された。<sup>(20)</sup>展覧会終了後、一時的に当館の寄託となるが、昭和四十五年(一九七〇)に竣工していた浄土寺内の収蔵庫に、ほどなくして返還されたらしい。その後、昭和五十年(一九七五)に特別展「鎌倉時代の彫刻」(於東京国立博物館)、同五十九年(一九八四)に特別展「ふるさとのみほとけ―兵庫の仏像」(於兵庫県立歴史博物館)、昭和六十三年(一九八八)に「大名美術展」(於アメリカ、ナショナル・ギャラリー)<sup>(22)</sup>に相次いで出陳された。平成九年にあらためて当館に寄託され、現在に至る。

#### 銘記

昭和四十六年度の修理に際して、像内下方の裾まわりに墨書のあることが確認された。銘記は翻刻がなされており、<sup>(23)</sup>阿弥陀仏号をもつ人名が複数認められることや、書風が一樣でないことなどが指摘されているもの、<sup>(24)</sup>写真図版は一部が公表されているにすぎない。<sup>(25)</sup>このたび実施した近赤外線撮影により、ほぼすべての墨書の画像が得られた。左記の翻刻のうち、ゴシック体でしめした部分が新たに確認した文字である。<sup>(26)</sup>



図19 絵葉書



図18 ガラス乾板 (『日本美術院彫刻等修理記録』のうち) 奈良国立博物館



図22 「阿弥陀如来立像 (東博寄託)」



図21 「浄土寺来迎仏正側面 (重要文化財指定) 伝快慶作」



図20 「来迎阿弥陀像 (兵庫県浄土寺)」

※墨書なし

(左側面材)



図24 同 部分



〔像内裾まわり 墨書〕  
(左前方材)〔図23〕

図23 阿彌陀如来立像 像内裾まわり墨書 左前方材  
(近赤外線画像) 兵庫・浄土寺

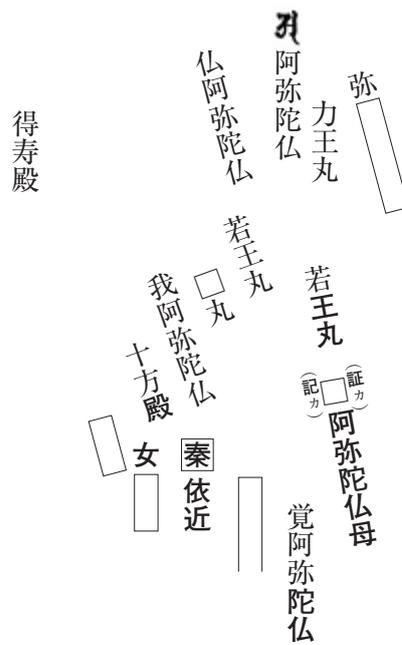
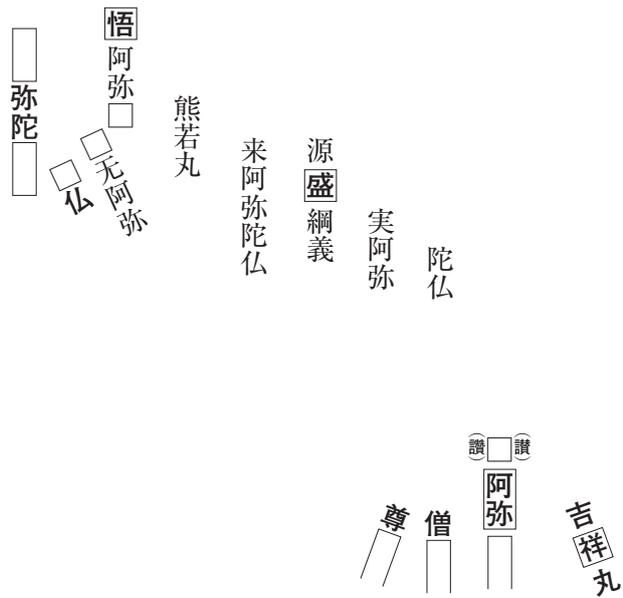


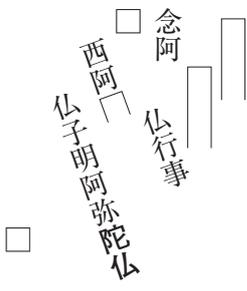


図26 同 像内裾まわり墨書  
左後方材 (近赤外線画像)



図25 同 像内裾まわり墨書 左後方材 (近赤外線画像)





(右後方材) [図27・28]

図27 阿弥陀如来立像 像内裾まわり墨書 右後方材 (近赤外線画像) 兵庫・浄土寺

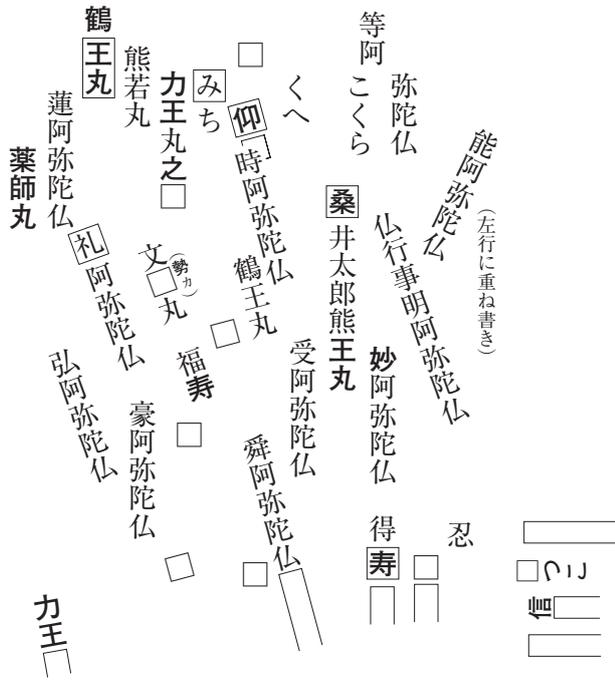


図28 同 像内裾まわり墨書 右後方材から右側面材、右前方材 (近赤外線画像)

文字は書風が一様でなく、複数の人物によりしるされたと推測されるが、いずれも鎌倉時代のものともみられ、本像制作時の結縁交名と考えられる。左前方材〔図23〕にしるされた「**丸**阿弥陀仏」〔図24〕は、快慶の阿弥陀仏号である「**丸**阿弥陀仏」の空点が抜けたものである。快慶作品には「**丸**阿弥陀仏」の表記がわずかに知られており、<sup>(27)</sup>いずれも「**丸**阿弥陀仏」の誤記とみて快慶を指すと考えられていることから、本像の銘記も同様の可能性がある。ただし、快慶自筆とみられている銘記<sup>(28)</sup>とは筆法を異にしている。

本像の銘記に登場する人名で、ほかの快慶作品の銘記および納入品にその名が認められる者が存在する。いずれも同一人である確証はないが、列記すると次のとおりである。

- 覚阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像阿形（銘記・納入品）・吽形（銘記）、八葉蓮華寺阿弥陀如来像（納入品）、東寿院阿弥陀如来像（納入品）
- 仏阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像吽形（納入品）、東寿院阿弥陀如来像（納入品）
- 我阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）
- 実阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像吽形（納入品）、東寿院阿弥陀如来像（納入品）
- 来阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像阿形（銘記・納入品）・吽形（納入品）、東寿院阿弥陀如来像（納入品）
- 明阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）
- 等阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士

像吽形（納入品）

- 能阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、妙阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、浄土寺阿弥陀三尊像中尊（銘記）、東大寺金剛力士像阿形（銘記・納入品）・吽形（銘記・納入品）、八葉蓮華寺阿弥陀如来像（納入品）、東寿院阿弥陀如来像（納入品）
- 時阿弥陀仏 東大寺金剛力士像阿形（銘記）
- 受阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）
- 蓮阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、新大仏寺如来像頭部（享保十二年陶瑩和尚実見書写銘）、東大寺金剛力士像阿形（銘記・納入品）・吽形（銘記・納入品）、八葉蓮華寺阿弥陀如来像（納入品）、東寿院阿弥陀如来像（納入品）
- 豪阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像阿形（銘記）
- 弘阿弥陀仏 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像吽形（納入品）
- 熊若丸 東大寺金剛力士像吽形（納入品）
- 吉祥丸 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像形（納入品）
- 熊王丸 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）
- 鶴王丸 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像阿形（銘記）
- 薬師丸 遣迎院阿弥陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像阿形（銘記）

このほか、左後方材〔図26〕にしるされた「阿彌□」について、「讚阿彌陀仏」とすれば、東大寺金剛力士像の阿形（銘記）・吽形（銘記）ともに同名が見出せる。また、右前方材〔図28〕の「礼阿彌陀仏」は頭文字が「礼」とすれば、遣迎院阿彌陀如来像（納入品）、東大寺金剛力士像阿形（銘記・納入品）・吽形（銘記・納入品）に同名が確認できる。

本像の銘記は、「礼阿彌陀仏」が快慶にあたる可能性があるほかは、勸進僧や高位の人物の名はみえない。また、阿彌陀仏号をもつ人名が多く確認できるものの、重源と関係が深く大部庄預所職にあつた観阿彌陀仏と如阿彌陀仏の名はない。阿彌陀仏号をもつ人名のうち、丈六本尊阿彌陀如来像と共通するのは現時点で妙阿彌陀仏に限られる。ただし、丈六本尊の銘記は像内左半部がほとんど未確認のため、今後の調査で共通する人名が見出される可能性はあるだろう。丈六本尊の結縁者は、大部庄を冠する聞阿彌陀仏をはじめ、多くが在地の人物と想像されるが、本像の銘記にはそうと推測できる人物が見当たらないこと、制作時期がさほど離れていないにもかかわらず共通する人名が少ないことも注意を要するところである。

なお、像内銘記のほとんどが結縁者名であるなかで、右後方材から右側面材にかけての位置には、仮名で「こくら／＼／みち」すなわち「極楽へ道」と読める墨書がある。詳細は不明ながら、本像が来迎会の本尊であることとの関連がいちおう考えられる。

### 浄土寺の来迎会と行像

本像は、りりしい表情とみずみずしい身体表現に鎌倉時代初期の

作風が顕著で、頭光と身光の圈帯に円相を透彫りする光背や光脚の形式が浄土寺本尊阿彌陀三尊像の中尊と共通し、裾の打ち合わせ方や衣文構成が右脇侍と一致することから、『浄土寺縁起』が伝えるとおり建仁元年までに快慶が制作したと考えられる。本尊阿彌陀三尊像の形制や顔立ちが宋風に彩られるのとは対照的に、本像には快慶無位時代の様式的特色がはっきりとあらわれている。

上半身を裸体、下半身に裙のみを着ける姿に造り、阿彌陀聖衆が来迎する様子を演劇的に再現する来迎会に際しては、これに縫製した実際の着物をまとわせ、浄土堂と薬師堂との間を台車に乗せて往復したとされる。『作善集』には、来迎会所用の阿彌陀如来像に関する記述が本像をふくめ三か所にあり、このうち渡辺別所の像と秦楽寺の南に施入されたという像はともに八尺（半丈六）<sup>29</sup>で、本像の髪際高もほぼ同寸である。したがって、重源が実践した来迎会の本尊の定型を本像にみてよいように思われるが、法会の内容には不明な点が少ない。

近世の史料ではあるものの「播州極楽山浄土寺来迎会記」（浄土寺蔵）によれば、重源が入滅した建永元年（一二〇六）六月五日から百か日の追善供養をおこない、それが明けた九月十五日に聖衆来迎の儀式を催したとされる。以来、天正年間まで連綿と続けられたが、天正十八年（一五九〇）に至って寺中荒涼のため途絶した。それが再興されたのは明暦二年（一六五六）のことで、総持院弘俊は多くの檀越の合力を得て、二十五菩薩の装束や楽器を設えた<sup>30</sup>と伝えられる。

また、文化四年（一八〇七）の「来迎会留書」（同寺蔵）によれば、明暦二年以降、寛文元年（一六六二）九月十五日、同四年九月十五日、元禄十四年（一七〇一）三月十五日、宝暦五年（一七五五）三月五日よ



図30 絵葉書 部分



図29 ガラス乾板 部分

り十五日まで、文化四年三月五日より十五日までおこなわれたとい  
う。<sup>(31)</sup>  
一方、近世の地誌『播磨鑑』の浄土寺条には、「俗ニ浄土寺ノ来迎  
会ト云テ、六十一年目ニ行ハル尤大法会也。兒ノ舞等アリ。小野町  
ノ領主構棧敷警固セラレ、諸役人多出四方ニ奔走シテ非常ヲ戒ム。  
遠近ノ参詣夥シ。時宝曆七丁丑年ニ当テ春三月行之」とあり、来迎  
会は六十年に一度のもつとも大規模な法会で、参詣者が多く、宝曆



図31 ガラス乾板 部分

七年（一七五七）三月に催されたとする。<sup>(32)</sup>「来迎会留書」の内容とは齟  
齬があるものの、近世における法会の様子を具体的に伝えており興  
味深い。浄土寺で最後に来迎会がおこなわれたのは、明治七年（一八  
七四）とも同十年（一八七七）ともされるが、<sup>(33)</sup>正確な時期は不明であ  
る。

来迎会の際には、本像をどのように動かしたのだろうか。そのこ  
とを知るための手がかりとなるのが台座である。大正修理以前の姿  
が写るガラス乾板や絵葉書の写真（図29・30）をあらためてみると、  
本像は釜蓋を伏せたような、裏面に左右二本の棧木を渡した円板上  
に立ち、その下には側板に雲文が描かれた多角形の台（図31）が確認  
できる。この多角形の台は、雲文が描かれた側板の下に角材の組み

物がみえており、昭和五  
年に豊秋氏が「現に内陣  
の裏には木製の小車のつ  
いた此の像をのせる框を  
組んだ粗末な台が置かれ  
ていた」とした<sup>(34)</sup>もの  
にあたる可能性があるが、  
その後に失われたため詳  
細は明らかでない。<sup>(35)</sup>

本稿で注目するのは足  
下に写る円板のほうで、  
大正九年二月の「京都市  
奈良県兵庫県宝物調査  
書」（日本美術院彫刻等



図32 ガラス乾板 部分



図33 絵葉書 部分

修理記録」、奈良国立博物館蔵)に「台座 蓮肉座ノ上張ノミラ存ズ」とあり、同十二年三月の「兵庫県国宝修理設計書」(同上)にも同様の記述がみられ、この時点で台座蓮肉の天板のみが残ったものとなされていたようだ。ガラス乾板の写真(図32)をみる限り、本像は円板上に自立していたのではなく、現状と同様に蓮肉天板の裏面から像底に釘を打ち付けて立たせていたと考えられる。また、大正修理では円板の裏面に二本の棧木を左右方向に渡して補強がなされたが、それ以前は二本の棧木が前後方向に渡されていたこともわかる。さらに写真を仔細に観察すると、右足の外側に突起物が写っており、ガラス乾板の写真よりやや高い位置から撮影した絵葉書の写真(図33)によれば、突起物は頭部が鑲状で円板上に打ち付けられているようにみえる。絵葉書では、両足の間にも似た突起物の存在が確認できるが、いずれも大正修理に際して取り外されたようで、いま付属しない。

ガラス乾板や絵葉書の写真によりうかがえる本像台座の大正修理前の状況、すなわち像本体を蓮肉天板上に固定し、天板の裏面に二本の棧木を前後方向に渡し、天板上に鑲状のものを打ち付けるといふ諸点から連想される作品がある。それは、本像と同時期に同じく快慶が制作した東大寺僧形八幡神像(図34)である。

筆者は先に発表した一論で僧形八幡神像が坐す蓮華座(図35・36)の構造に注目し、像本体が蓮肉にあたる天板部(以下、蓮肉主要部)の上面にかつて釘で固定されていたこと、蓮肉主要部の四方に鉄製の円鑲が取り付けられていること、蓮肉主要部を蓮華にあたる周縁部(以下、蓮華周縁部)へと落とし蓋状に嵌め込む構造で、蓮華周縁部の両側面中央および蓮肉主要部裏面の棧木側面中央にそれ



图34 僧形八幡神坐像 奈良·東大寺



图36 同 蓮華座（裏面）



图35 同 蓮華座（上面）

それ円形孔を穿ち、左右から丸棒を通して蓮肉主要部と蓮華周縁部とを結合していることを再確認した<sup>(36)</sup>。そして、この蓮肉主要部と蓮華周縁部とが分離可能な構造は、必要に応じた後日の移送を想定したものと考え、鉄製円環は蓮肉主要部と一体化した像本体を持ち上げるための取っ手であり、像本体を乗り物すなわち神輿に乗せて練り歩く行像としての機能が付与されたと推測した。東大寺の鎌倉再興にあたり、大仏や神体の再生のみならず、奈良時代の大仏造立に際して八幡神が輿に乗り、九州・宇佐の地から上洛してきた様子を演劇的に再現することで、その由緒の回復が試みられた可能性を提起したのである。

ガラス乾板や古写真に写る足下の円板が、像本体と同時期のものである確証はない。しかし、本像と同じく建仁元年に快慶が制作した東大寺僧形八幡神像の蓮肉主要部との類似を重視すれば、像本体と蓮肉天板を一体化させる構造は造立当初からのものだったと考えてよいだろう。僧形八幡神像の蓮華周縁部に相当する部分が本像にもかつて存在し、落とし蓋状に嵌め込む機構を用いて来迎会の際の移送がおこなわれていたと推定できる<sup>(37)</sup>。二像の台座は、重源の意を受けて快慶が制作した行像の構造上の特徴を具体的に伝えるものであり、本像との類似により僧形八幡神像が行像として造られた可能性は、さらに高まったといえるだろう。

(やまぐち りゅうすけ／奈良国立博物館学芸部主任研究員)

注

(1) 本像を取り上げた主な先行研究は、左記のとおり。

豊秋(源豊宗)「美術史雑誌 裸形像の一例としての播州浄土寺の阿弥陀像」『仏教美術』一五、一九三〇年一月。

毛利久「仏師快慶論」吉川弘文館、一九六一年十月。増補版は一九八七年十一月。

光森正士「木造裸形阿弥陀如来立像」奈良国立博物館編『阿弥陀仏彫像』東京美術、一九七四年三月。

毛利久「仏教美術の諸相」兵庫県史編集委員会編『兵庫県史』二、兵庫県、一九七五年三月。

東京国立博物館編『特別展図録 鎌倉時代の彫刻』一九七六年三月。金子啓明『運慶・快慶』(『新編名宝日本の美術』一三)小学館、一九九一年十月。

齊藤孝「彫刻」小野市史編纂委員会編『小野市史』別巻文化財編、小野市、一九九六年三月。

なお、当館では現在、本像を上まわる像高約五メートルの奈良・金峯山寺金剛力士像を令和十年(二〇二八)までの予定で預かり、本年二月二十三日よりなら仏像館で特別公開を実施している。

(2) 実査は令和二年(二〇二〇)一月六日と十二月二十一日におこなった。当館編集・発行の展覧会カタログ『大勧進重源 東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出』(二〇〇六年四月)をはじめ、『なら仏像館 名品図録』では平成二十二年(二〇一〇)の初版以降、同三十年(二〇一八)

の第五版まで像高を二二六・五cmと表記してきたが、ここに訂正する。そのほかの法量は左記のとおり(単位cm)。

本体

頂上額	五〇・一	面長	二八・五	面幅	二六・六
耳張	三七・六	面奥	三八・九	胸奥	左四一・〇
胸奥	右四〇・三	腹奥	四〇・四	肘張	七八・五
裾張	六四・五	足先開	四五・五		
光背					
全高	三五〇・七	光条最大張	一五六・一		
頭光圏帯径	七三・五	身光圏帯張	九一・五		
光脚張	七九・三	光脚高	二六・五		

台座

全 高 五三・七 蓮肉径 七八・四

蓮肉高 二三・七 下框径 一五一・五

像底孔径 七・〇

(4) 「日本美術院彫刻等修理記録」奈良国立博物館蔵。

(5) 昭和四十六年度の修理記録は、公益財団法人美術院より提供を受けた。

(6) 調査はオリンパス株式会社の協力のもと、「工業用ビデオスコープ PLEX NX」を用いておこなった。

(7) 山口隆介「東大寺の鎌倉再興における僧形八幡神坐像造立の意義―蓮華座の構造を手がかりに―」栄原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究3 東大寺の思想と文化』法蔵館、二〇一八年三月。

(8) 副島弘道「阿弥陀如来及び両脇侍像（浄土寺）」水野敬三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集』鎌倉時代造像銘記篇一、中央公論美術出版、二〇〇三年四月。

(9) 「京都府奈良県兵庫県宝物調査書」（日本美術院彫刻等修理記録のうち）奈良国立博物館蔵。

(10) 四月十五日付の『官報』二三〇八号。

(11) 正確な撮影時期は不詳だが、「日本美術院彫刻等修理記録」のうち大正十二年三月の「兵庫県国宝修理設計書」に収録される本像の調査に、「調査及写真ニヨレハ肉髻白毫欠落セリ」と朱書きがある。ここにみえる「写真」がガラス乾板を指すとみられる。

(12) 絵葉書下端の説明書きに「(国宝)」と印字されることから、本像が旧国宝の指定を受けた大正九年以降、修理がおこなわれた同十二年度以前の制作と判明する。なお、これと同時に制作された浄土寺所蔵品の絵葉書として、本尊阿弥陀三尊像、重源上人像、阿弥陀如来像（薬師堂安置）、弘法大師像（同上）がある。

(13) 上司永晋「俊乘上人研究 浄土寺を訪ふ」『靈楽』四、一九二五年十月。前掲注1豊秋論文。

(14) 東京国立博物館編『東京国立博物館勧告、承認出品、社寺、個人寄託目録』出版年不詳。

(16) 田辺三郎助「播磨浄土寺とその彫刻」『月刊文化財』九六、第一法規、一九七一年九月。

(17) 大口理夫「播磨の浄土寺」『画説』三五、一九三九年十一月。

(18) 国宝浄土寺浄土堂修理委員会編『国宝浄土寺浄土堂修理工事報告書』

一九五九年。

(19) 永井信一「播磨別所―浄土寺」『古美術』一五、一九六六年十一月。

(20) 奈良国立博物館編『阿弥陀仏彫像』一九七二年四月。

(21) 当館所蔵の列品台帳による。

(22) 大名美術展への出陳は、文化庁奥健夫氏のご教示により知り得た。

(23) 田辺三郎助「伊賀別所本尊考」『仏教芸術』一〇五、一九七六年一月。

(24) 前掲注1光森解説。

(25) 前掲注1齊藤解説の挿図として、左前方材と右側面材の墨書の一部を

写した写真が掲載される。

(26) 銘記の解説・翻刻に際しては、野尻忠氏、浜野真由美氏（大阪大学大学院）の教示を得た。

(27) 建久八年（一一九七）の和歌山・金剛峯寺執金剛神像内頸部墨書、京都・金剛院深沙大將像内胸部刻面墨書、大阪・八葉蓮華寺阿弥陀如来像の像内納入品のうち「**阿**阿弥陀仏御房宛僧賢印書状」の宛所。

(28) 京都・松尾寺阿弥陀如来像、同・如意寺地藏菩薩像の像内頸部前面および像内両脚部墨書、同・金剛院執金剛神像左足柄内側墨書、同深沙大將像内胸部刻面および左足柄内側墨書、八葉蓮華寺阿弥陀如来像の像内胸部墨書があり、八葉蓮華寺像の像内納入品のうち「**阿**阿弥陀仏御房宛僧賢印書状」の紙背の「**阿**阿弥陀仏」も同筆である。

(29) 渡辺別所の条には、「来迎堂一字奉安皆金色来迎弥陀来迎像一、尺八」とあり、秦楽寺の南に施入された像については「秦楽寺南施入半丈六迎講像一体」としるされる。秦楽寺は現在の奈良県磯城郡田原本町に位置する同名の寺院を指すとみられる。

(30) この史料の存在は、關信子氏のご教示により知り得た。

(31) 宝暦五年の来迎会については、開山堂の厨子にかけられた帳の裏面にもしるされる。

「御開山俊乘上人五百五十遠忌

宝暦五<sub>亥</sub>年三月四日ヨリ同十五日マデ来迎会勤行之御造立

極楽山浄土寺

衆徒中」

(32) 平野庸脩『播磨鑑』播磨史談会、一九〇九年十一月。

(33) 前掲注1豊秋論文には、「伝ふる所によると此の像は、此の寺で六十年毎に行はる、来迎会に、車に乗せられて引き廻されるといふ事である。其の最近に行はれたのは明治七年であつたと云はれる」とある。

一方、加東郡教育会編『加東郡誌』（一九二三年十月）の浄土寺条は、「来迎会 当寺什物二十五菩薩の装束を著して阿弥陀如来来迎の会式を執行す。明治十年執行せし以来修せず」とする。

(34) 前掲注1豊秋論文。

(35) 雲文の描写からも本像と同時期の作ではないとみられる。大正十二年度の修理にもなう台座の新調により不要となり、側板の一部が脱落するなど損傷も進んでいたため処分されたのだろう。

(36) 前掲注7山口論文。

(37) 天板上に打ち付けられた鑲状のものも、僧形八幡神像の蓮肉主要部の鉄製円鑲と同様に、像本体を持ち上げるための取っ手の一部の可能性がある。ただし、本像の大きさからすれば鑲状のもののみで持ち上げたと考えにくく、足場を組んだ上で両腕や右肘を持って上げる際に手がかりとして用いたのではなからうか。

口絵1、図1（11・15）17・34（以上、佐々木香輔氏撮影）、口絵2・3、図18・29・31・32は奈良国立博物館所蔵の画像データを使用し、浄土寺と東大寺からご許可をいただいた。図12・13・23・28は筆者撮影。

図20は『仏教美術』一五（一九三〇年一月）、図21は国宝浄土寺浄土堂修理委員会編『国宝浄土寺浄土堂修理工事報告書』（一九五九年）、図22は『古美術』一五（一九六六年十一月）より転載した。

〔付記〕

本稿は、令和二年十一月七日にオンラインで開催された研究討論会「日本の仏教彫刻―作品生成の場」（京都大学人文科学研究所「東アジアにおける阿弥陀如来の表象」班主催）において実施した口頭発表「快慶と阿弥陀仏造像」の内容に加筆修正をおこなったものである。また、JSPS科研費JP18K12354「仏師快慶の工房制作と分業体制に関する基礎的研究―三尺阿弥陀を中心に―」（研究代表者 山口隆介）の研究成果の一部である。

〔謝辞〕

本稿をなすにあたり、写真掲載のご承諾をいただくとともに、さまざまのご教示を賜った浄土寺歙喜院住職鑑快穰師、同副住職鑑光顕師に深甚の謝意を表します。岩下淳、粕谷修一、神戸佳文、關信子の各氏からは折に触れてご教示をいただきました。また、銘記画像の合成処理にあたり佐々木香輔氏を煩わせました。ここにしるして感謝の意を表します。

奈良国立博物館研究紀要

## 鹿園雑集

第二十三号

令和三年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8233

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社

天理市稲葉町八〇番地